

# 博士論文要旨

## 入院から在宅医療移行の過程における薬剤師職能の適正化に関する研究

滝澤 康志

我が国では地域包括ケアシステムの確立を進めている。本研究では、病院薬剤師が入院治療開始から在宅療養を送り最後を迎えるまで積極的に関わり適正に薬物治療が選択され継続できることを目的とし、以下に示す知見を得た。

### 1. がん化学療法施行に伴う患者の栄養状態の予測に関する研究

独自に考案した悪心・嘔吐点数と栄養指標にどのような影響を及ぼすか検討し、悪心・嘔吐点数の増加はヘモグロビン数の低下が要因であった。ヘモグロビン数が低下し酸素運搬能が下がることにより全身倦怠感が出現し、Quality of Life や Activities of Daily Living に影響を及ぼす悪循環に陥る可能性が有る事を明らかにした。

### 2. 重症がん患者に対する新規治療への薬剤師の関わりに関する研究(症例報告1)

進行胆嚢癌に対し化学療法を施行中に、基礎疾患の関節リウマチの症状緩和の為に、T細胞選択的共刺激調節剤のアバタセプトを併用投与し手指関節症状が中疾患活動性から寛解まで改善する事ができた。また、がん化学療法とアバタセプトの併用療法中での癌病変のコントロールは良好であり、併用療法が行える可能性を明らかにした。

### 3. 重症がん患者に対する新規治療への薬剤師の関わりに関する研究(症例報告2)

進行胃癌の治療中に、右心室転移が認められ息苦しさや全身浮腫が増悪した。ニボルマブの投与により右心室転移は縮小したが、自己免疫性関連副作用(Immune Related Adverse Event : irAE)によりニボルマブ投与が中止となった。薬剤師がirAE対策として利尿薬、ステロイドの投与設計に関わることでirAEを重症化させずニボルマブ投与を再開し治療を継続できた。チーム医療の中で薬剤師の介入の重要性を明らかにした。

#### 4. 在宅医療におけるオピオイド適正使用に対する薬剤師の関わりに関する研究(1)

在宅訪問がん患者は、在宅で過ごす日数は平均約 5 週間と短く、オピオイドが安全に投与され在宅で平穏な時間を過ごせる事の意義は大きい。しかし、介護者側の様々な事情により定期的与薬ができずに疼痛コントロールの悪化が認められる場合がある。患者が入院から在宅に移行する場合、オピオイドには貼付剤などがあり家族にとって扱い易く負担が少ない薬剤の選択を提案することが重要である事を明らかにした。

#### 5. 在宅医療におけるオピオイド適正使用に対する薬剤師の関わりに関する研究 (2)

在宅療養では、オピオイドの与薬介助は、看護師だけでなく介護福祉士、ヘルパーも経験していた。本研究では、薬剤師がオピオイドに関して定期的なカンファレンスを開催している施設の介護従事者は、オピオイドに関する知識習得の積極性、正しい知識の保持が高かった。オピオイドを安全かつ適切に使用する為には、介護従事者に正しい知識を習得させる事が薬剤師の役割である事を明らかにした。

#### 6. 在宅医療のポリファーマシー解消へ薬剤師の関与と再入院の関連に関する研究

在宅医療移行患者の多剤併用に対する薬剤師の処方提案は 6 割以上が症状からの提案であった。薬剤師の介入により薬剤数が減少した患者では 1 年以内の再入院の割合が低かった。薬効、副作用を確認した多剤併用への薬剤師の介入は、不必要な入院を減らす事で再入院患者を減らす可能性がある事を明らかにした。

以上、本研究では患者の治療開始から在宅療養を送り最後を迎えるまで病院薬剤師が関わる事で、最適な薬物治療が選択され継続できる事を臨床の観点から有用である事を明らかにした。これら薬剤師による臨床薬学的介入は、我が国が押し進めている地域包括ケアシステムの確立ならびに適正な薬物療法のための有益な知見となりえる。

## 論文審査結果の要旨

氏名（本籍）	滝澤 康志 ( 長野県 )
学位の種類	博士（薬学）
学位記番号	乙 第 397 号
学位授与年月日	令和2年3月10日
学位授与の条件	学位規則第4条第2項該当者
学位論文の題名	入院から在宅医療移行の過程における薬剤師職能の適正化に関する研究
論文審査委員	(主査) 塚本 桂
	(副査) 足立 哲夫
	(副査) 臼井 茂之

地域包括ケアシステムの確立を進めている我が国において、入院治療から在宅療養への移行及び適正な在宅医療による患者 Quality of Life (QOL)の向上が求められている。この過程において本研究は、薬剤師の介入による薬物療法の適正化により患者 QOLの向上に貢献し得ることを、実臨床データを基に明らかにしたものである。すなわち①がん化学療法に伴い発生する悪心・嘔吐の強度は患者の栄養状態と関連していることを見出し、この副作用軽減のために栄養補助療法が有効である可能性を示し、②薬剤師による臨床経過分析と文献的考察に基づく新規治療薬提案によって副作用対策がなされた薬物療法が継続され、有効かつ安全な治療成績を得た症例を見出し、③終末期がん患者の在宅治療での QOL 向上に対して、オピオイドを用いた疼痛管理ならびに安全かつ適切な使用に、介護従事者の教育および取り扱いしやすい剤形選択により服薬コンプライアンスが向上すること、④在宅患者の多剤併用を改善することで、再入院を減らすことができることを明らかにした。これらの結果は、薬剤師職能の重要性を明確にし、適正化により安全かつ有効な薬物療法と患者の QOL 向上に繋がることを示したものであり、本論文を博士（薬学）の論文として価値あるものと認める。